

## 日本語がもつ独特のニュアンスに

# この国の“もてなす心”が見えてくる

各国に“おもてなしの精神”があり、もてなす流儀はそれぞれ違います。

今秋、東京国際フォーラム等で国際通貨基金・世界銀行年次総会が開催されるのを機に、この街らしいおもてなしの精神について考えてみました。

### 一期一会の精神でおもてなし

多少大胆な意見になるかもしれませんが、言語には二種類あると思います。ひとつは汎用化しグローバル化していくことで、多くの人に使われ誰にでもストレートに意味が通じやすくなっていく言語です。そしてもうひとつは、成熟していくことで言い回しが複雑になり、限られた人たちにしか伝わりにくくなっていくものです。前者の代表は英語であり、後者にはフランス語や日本語が当てはまるのではないのでしょうか。日本語はある意味閉鎖的で、究極的には言葉を使わずにコミュニケーションをとることが最上とされるところがあります。そこには、物事をはっきり言うのは洗練されていない、感情をストレートに出すのは未熟であるという自制心も働いているのだと思います。実は、日本のおもてなしの精神にも、そういう部分があるのではないのでしょうか。

たとえば、旅館の接客を考えると、食事や風呂の時間が決められていたり、食事や布団を敷くために平気で部屋に入ってきたりします。旅館でのおもてなしは、プライバシーの壁を乗り越え相手に入っていきことで成立し、逆にもてなされる側もそれを受け入れていかないと始まりません。一般に西洋の価値観では、自分の意志で決めることが自由の象徴であり、決定権があることに価

値があります。ところが、もてなす側に決定権があるのが日本流で、もてなされる側は「相手に身を委ねることの心地よさ」を味わうのが、日本のおもてなしの神髄といえます。ただこのおもてなしは、双方に信頼感がないと成立しません。

これを象徴するのが茶の湯の「献立」という言葉です。「献立」は相手のことを知り、季節を加味し、旬を盛り込み最高の組み立てで出すものです。しかし、あくまでももてなす側の亭主がすべてを決めます。それが、お客様に決定権があり好きなものを選んでいただく「メニュー(menu) = 品書き」と違うところです。日本のおもてなしは、このように「茶の湯」の精神に象徴されるところがあり、はじめは強い緊張感がありますが、次第に食事が進み、酒が酌み交わされ、静かに茶碗をすすりあう頃には、緊張は緩んで主人と客の間には強い共感や連帯感が生まれ非常に心地よい時間になっていくのだと思います。

### 大丸有を好きになることで、おもてなしがはじまる

日本流のおもてなしのディープな精神を共有していただくには、ある程度の時間を必要とするかもしれません。では、その入口ではどうすればいいのでしょうか？ たとえば大丸有地区を訪れた外国のお客様に、街の人たちみんな



江口 裕之 CEL 英語ソリューションズ 最高教育責任者

The Japanese way of hospitality referred to as “omotenashi” is well reflected in the spirit of the tea ceremony. The guests may feel a little nervous at first, but soon they feel relaxed, finding strong bonds built between them and the host. In a way, the essence of “omotenashi” lies in the guests leaving everything up to the host, while the host takes all possible means to entertain the guest. To create such relationships, mutual trust is immensely important. As a first step, therefore, let's be friendly to those visiting this area from abroad to show our goodwill of “omotenashi.” Then, by explaining how attractive our town is from your own perspective, you will surely be able to communicate to the visitors the prevailing values deep-rooted in the Japanese society.

が日本語で「YOKOSO!」と声をかけることです。英語をしゃべれないからと臆することはありません。あちらでも、こちらでも「YOKOSO!」という言葉を目にするだけで、外国から来たお客様は自分たちが歓迎されていることを知り、お互いの信頼関係を築ききっかけになるはずで

そして、次に行うのは、もてなす側がこの街のよさ知って、それを伝えることです。この街にはこの街からしか伝えることができないメッセージがあるはずで

それはこの街に対する一人ひとりの「愛情」です。自らの主観的な視点からこの街の魅力を伝えることで、その背後にある普遍的価値(=日本のおもてなし)を伝えることもできるはずで

そのためには、まず自分たちがこの街を好きになり、伝えたい何かをもつ必要があります。英語力はあくまで、エキストラです。英語をしゃべれるようになる前に、この街の魅力を自分なりにいま一度考えてみることで、おもてなしの準備の第一歩といえるのではないのでしょうか。

Profile

1957年長崎生まれ。プロのミュージシャンから一転して通訳・翻訳家として活躍。2009年からNHK教育テレビで「トラッドジャパン」講師。同番組は言葉を通して文化を啓蒙するというコンセプトでつくられ、それが「トラッドジャパンのこころ」(日本放送出版協会)などの書籍にもなっている。